

# 水戸城下における近世生産遺跡の調査と課題

しちめんせいとうじよあと  
—七面製陶所跡の調査を中心に—

川口 武彦・関口 慶久

(水戸市教育委員会)

## 1. はじめに

近年、茨城県内において近世陶磁器の生産遺跡の調査・研究成果が相次いで公表されている(伊藤 2003、河野・水野・河野 2004、住谷 2004,)。ことに瓦吹堅氏による北茨城市域の窯跡を踏査し、表採資料の詳細な観察とともに文献資料からの考察も加え、いわゆる松岡焼系陶器をはじめとする水戸藩領および棚倉藩領の窯業形態の一端を考究している(瓦吹 1986、1991、1992、1993、1994、1995、1997、2003)。

また笠間焼についても、田原康治氏・吹野富美夫氏が表採資料および伝世紀年銘資料をもとに、笠間焼の編年作成にむけた精力的な取り組みがなされつつある(田原 2005a、2005b、吹野 2005a、2005b)。

他方、旧水戸藩の城下町を含む水戸市では、2005年から策定を開始している第5次総合計画において「新たな観光資源の創出」と「伝統的技術を活用した新たな産業の創出」が謳われており、伝統産業である七面焼の見直しと活用を図ろうという気運が高まってきている(水戸市 2005)。これを受けて水戸市教育委員会は、平成17年10月3日～11月10日の期間に七面製陶所を構成していた連房式登窯の所在確認と操業形態の把握を目的とした国・県費補助による確認調査を実施することとなった。

調査成果の一端については、既に公表されているが(水戸市教育委員会 2005、川口・新垣・関口 2006、鬼頭 2006)、本稿では平成18年7月現在の調査所見を紹介し、併せて最近発見された、囲裏窯跡(かこえうらかまあと)についても紹介し、水戸城下における近世生産遺跡の調査と課題を提示する。

## 2. 七面製陶所の沿革と七面製陶所跡／七面焼研究のあゆみ

### (1) 七面製陶所の沿革

確認調査の成果を説明する前に七面製陶所の沿革について触れておく(第1表)。

七面製陶所は第9代水戸藩主、徳川斉昭によって開かれた製陶所である。『水戸藩史料』によると、文政12年(1829)に斉昭(烈公)が30歳で第9代水戸藩主になると、翌年の天保元年(1830)には藩内の陶土の調査を実施し、常陸太田在の町田と下野の小砂村で陶土を発見している。そして、天保4年(1833)には陶土の産出地である町田と小砂に窯を築こうとしたが、藩内事情から実現できなかったため、第1回目の就封(帰国)の時、お手もと金で水戸の城東、下町の瓦屋(瓦谷)に陶器製造所を開設したとされる。

瓦屋の陶器製造所では天保5年(1834)から陶器焼成が軌道に乗りはじめ、翌6年春には磁器の焼成に成功したという。そして、天保9年(1838)には神崎七面堂の下に七面製陶所を設置し、瓦屋の製陶所もここへ合併された。天保12年(1841)には肥前唐津の陶工傳五郎を雇い、製陶所の拡張準備を行うが、

藩内事情から陶業拡大政策は進展しなかった。こうした動きと並行して、天保13年（1842）には七面製陶所の北側の台地上に偕楽園が開園される。

しかし、弘化元年（1844）に斉昭が幕府から致仕謹慎を命ぜられ、水戸藩の天保改革は挫折する。そして明治4年（1871）の廃藩置県に伴い、藩の資金的援助を失った七面製陶所も閉鎖された可能性が高い。正確な閉鎖年代については不詳であるが、河野一也氏は、明治2年には閉鎖されたと推定されている（河野・水野・河野 2004）。このような状況から開窯から閉鎖に至るまで約30年間操業した製陶所であったと思われる。

西暦	和暦	出来事
1829	文政12	徳川斉昭, 第9代水戸藩主となる(30歳)。
1830	天保1	徳川斉昭, 藩内の陶土の調査を実施し, 常陸太田在の町田と下野の小砂村で陶土を発見。
1831	天保2	徳川斉昭, 伊藤友寿を陶業研究のために, 京都へ派遣。
1833	天保4	徳川斉昭, 陶土の産出地である町田と小砂に窯を築こうとしたが, 藩内事情から実現できなかったため, 第1回目の就封(帰国)の時, お手もと金で水戸の城東, 下町の瓦屋(瓦谷)に陶器製造所を開設。
1834	天保5	瓦屋の陶器製造所で陶器焼成が軌道に乗りはじめる。
1835	天保6	瓦屋の陶器製造所で磁器の焼成に成功。
1838	天保9	徳川斉昭, 神崎七面堂の下に七面製陶所を設置し, 後に瓦屋の製陶所もここへ合併。
1841	天保12	徳川斉昭, 肥前唐津の陶工傳五郎を雇い, 製陶所の拡張準備を行うが, 藩内事情から陶業拡大政策は進展せず。
1842	天保13	徳川斉昭, 七面製陶所の北側の台地上に偕楽園を開園。 神崎陶器場(七面製陶所)の陶器入札の布達が出される。
1844	弘化1	徳川斉昭が幕府から致仕謹慎を命ぜられ, 水戸藩の天保改革は挫折。
1871	明治4	廃藩置県に伴い, 藩の資金的援助を失った七面製陶所も閉鎖された可能性が高い(推定)。

第1表 七面製陶所の沿革

## (2) 七面製陶所跡／七面焼研究のあゆみ

七面製陶所跡については『水戸藩史料』などの文献史料や『常磐公園攬勝図誌続編原稿・窯場之図』（松平俊雄著）、『好文亭四季模様之図』（巨漣幽作、幕末と明治の博物館所蔵）などの絵画資料に記述が見られる事から、その存在は古くから知られていた（木戸田1976、松崎 1978）。しかし、本製陶所跡が考古学的にはじめて認知されたのは、1984年に水戸市立博物館が開催した特別展示「水戸藩のやきもの」展において担当学芸員が採集した七面焼と窯道具の破片と採集地点の写真を公表したことであった（水戸市立博物館 1984）。

この表面採集資料は、その後、1997年に茨城県立歴史館で開催された笠間焼の特別展示や1998年に窯業史博物館で開催された小砂焼の特別展示、2000年に飯能市郷土館で開催された飯能焼の特別展示にも出品されたりしている（加藤 1997、窯業史博物館 1998、尾崎 2001）。

しかしながら、近藤京嗣氏による現地踏査は行なわれたものの（近藤 1988）、窯跡の所在や内容確認を目的とした発掘調査などは行われず、長らくその実態が不明であったことから幻の製陶所とも言われてきた。

七面焼が初めて文献で紹介されたのは、ボストン美術館 (Museum of Fine Arts) に所蔵されているEdward Sylvester Morseコレクションのカタログである (Morse 1901)。本書には、篆書体の「偕楽」という2文字が見られる瓢箪形の銘款を持つ焼物が2点掲載されている (Case No. 12の1357と1358)。しかしながら、七面焼という名称は用いられておらず、Hidachi (常陸の誤記カ) のKairaku (偕楽焼カ) という名称が用いられている。

また同書には、篆書体の「偕楽園」の3文字が見られる瓢箪形の銘款を持つ焼物が2点掲載されているが (Case No. 15の1577と1578)、これらは先に挙げたHidachiではなく、紀州藩のお庭焼である偕楽園焼として分類されている<sup>1)</sup> (Morse 1901)。

その後、1920年に大西林五郎・藤井理白によって編集された『陶器全書続編 日本陶工傳』には、水戸後楽園焼の名称で、Edward Sylvester Morseコレクションのカタログに掲載された篆書体の「偕楽」の2文字が見られる瓢箪形の銘款が掲載されているが、「文化前後に於て、國主徳川侯の庭窯として、交趾風に倣へる楽焼を出し、國主の落款、偕楽園と印したるものにて、極めて上好的ものなれども、世に伝はれるもの少し、創始の年月も亦明かならず」とあるように江戸の水戸藩邸宅で生産されたお庭焼である後楽園焼と混同されていたようである (大西・藤井編 1920)。

また、1940年に陶器全集刊行会によって編集された『日本古陶銘款集 近畿編』にも「チ 瓢型隸書体の「偕楽園」モールス蒐集」(陶器全集刊行会 1940: 91頁) とあるように、Edward Sylvester Morseコレクションの「偕楽園」の3文字が見られる瓢箪形の銘款を持つものが掲載されているが、紀州藩のお庭焼である偕楽園焼<sup>2)</sup> のものとされている (陶器全集刊行会 1940)。

このように戦前の先行研究では、七面焼の名称はまだ、用いられておらず、水戸藩や紀州藩のお庭焼である後楽園焼や偕楽園焼と混同されていた。七面焼の名称が用いられるようになったのは、1984年に水戸市立博物館が企画／開催した特別展示「水戸藩のやきもの」展以降である。

こうした、銘款の研究とは別に注目すべき研究は、上の畑銀山焼を復興させた陶芸家の伊藤瓢堂氏による七面焼の理科学的研究である。伊藤氏は、山形県工業技術センターの協力を得て、七面製陶所跡の採集資料 (陶器) の蛍光X線半定量分析を行っており、自ら入手した小砂産の原石や町田産の原石、町田産原石を水簸したもの、町田焼、小砂焼 (大金御用瀬戸焼)、復元製作した平成町田焼との比較を行ない、七面焼が小砂産の原石と類似する元素組成を持つことを指摘されている (伊藤 2003)。齊昭が作らせた小砂焼や町田焼と小砂産や町田産の原石を同じ方法で七面焼との元素組成上の共通点と相違点を示した点では、先駆的な試みとして評価すべきであろう。また、伊藤氏は、平成18年7月17日に開催された水戸史学会大会の記念講演の中で、先の分析結果に追加試料を加えたものを公表され、町田焼と七面焼・小砂焼の原料はナトリウムの数値に大きな違いがあること、小砂の単独水簸粘土ではシリカ分が多くて、ロクロ引きで薄作りは困難であることからアルミナ分など粘土質の多い土の粘土を入れる必要があること、その割合が7:3ぐらいであること、出土品に半磁器質のものが多く、直接火にかける土瓶類などはそういう胎土が望ましいこと、イッチン (筒描き) による下絵や染付の文様との類似性から飯能焼系の熟練した職人や肥前古伊万里系の絵付師がいたことなど、陶芸家ならではの視点から七面焼の特

徴を見出されている（伊藤 2006）。

### 3. 七面製陶所跡第一次確認調査の成果

#### （1）遺跡の位置と周辺の環境

七面製陶所跡は、那珂川の支流のひとつである桜川の左岸の標高6m～10mの緩斜面部に所在する（第1図）。所在地は、水戸市常磐町6015-1番地である。場所は、偕楽園臨時駅を降りてすぐ北側に見える斜面地である。直近には、周知の埋蔵文化財包蔵地は確認されていないが、国指定史跡名勝「常磐公園（偕楽園）」が北西に位置している。

#### （2）遺構

**【連房式登窯】** 調査着手前に下草刈りを行ったところ、1984年に水戸市立博物館で開催された「水戸藩のやきもの」展の図録において指摘されていた位置（第2図のA地点）から、陶磁器類や窯道具の破片が採集されたことから、トレンチを設定し、掘り下げや拡張を行った。その結果、本地点から連房式登窯の最上段の燃焼室の砂床の一部と関連する物原を確認することができた。

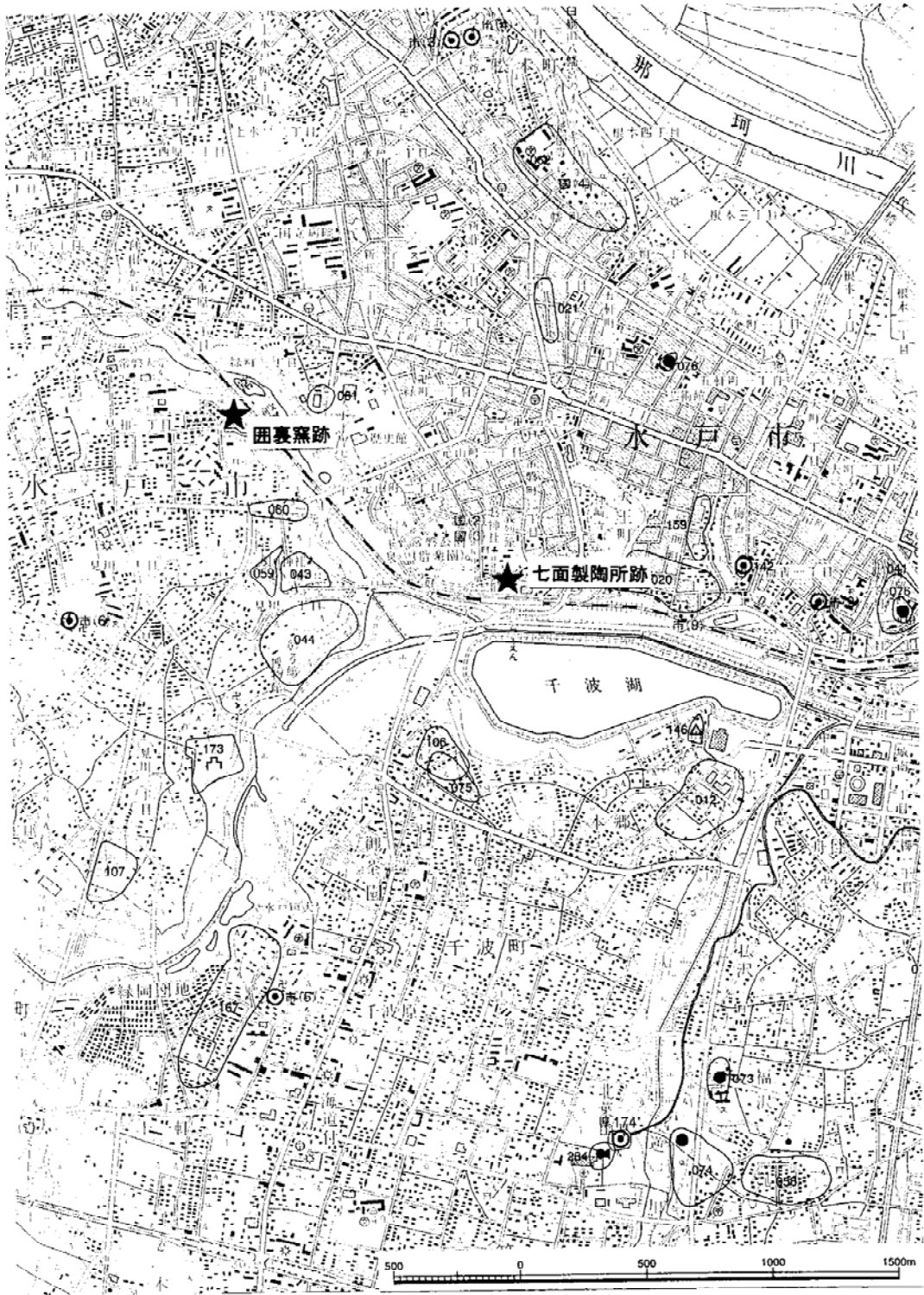
窯は七面製陶所の廃絶以降に展開した土地改変や水路の埋設による攪乱を大きく受けており、遺存状況は良好とは言えないが、砂床とみられる砂の広がりから燃焼室は奥行き2.0m以上、幅3.6m以上の広さを持っていたと推定される。砂床については、部分的に、断面を断ち割った結果、さらに下からも焼土とともに煉瓦や陶磁器類の破片、窯道具の破片が大量に出土した。そのことから、この窯は一度、壊されて再度、同じ場所に作り替えられていたものであることが明らかとなった。この窯は「好文亭四季模様之図」（亙遷幽作、幕末と明治の博物館所蔵）の最も東側に描かれている「諸事御せ戸やき場」と考えられる（第3図）。「好文亭四季模様之図」によると「諸事御せ戸やき場」は4室から構成される連房式登窯のようであるが、同様の絵付が施された個人蔵資料の磁器染め付け花生の下絵では、「諸事御せ戸やき場」と思われる窯が8室から構成される連房式登窯のように描かれている（第10・11図）。物原と窯跡からは2万点以上の陶磁器類と窯道具の破片が出土した。

また、この窯跡から南西方向に75m離れた位置（第2図のB地点）からは別の窯に関連するとみられる物原が確認された。

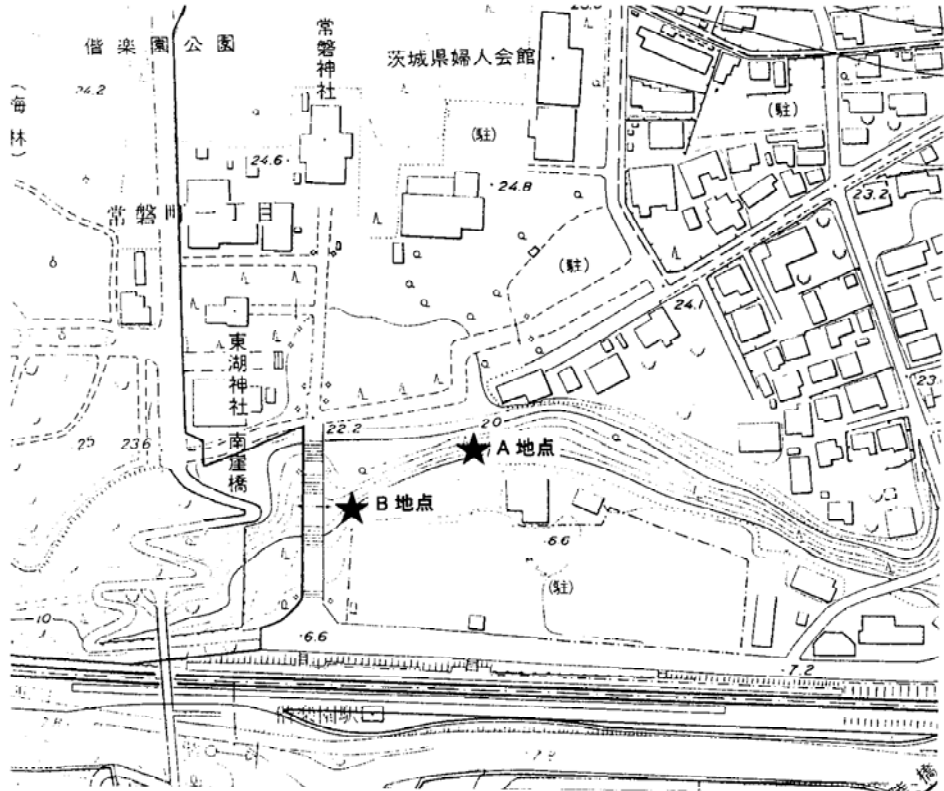
**【性格の異なる2つの物原】** A地点の物原からは、サヤ鉢や輪ドチなどの窯道具と共に、土瓶や片口鉢など未製品の破片が大量に出土していることから（第4図）、日常雑器の焼成を目的とした窯に伴う物原であったと考えられる。

他方、B地点の物原からは、施釉された遺物も僅かに出土しているが、その多くは下絵の施された素焼段階の土瓶・土瓶蓋、徳利、皿などである（第5図）。このことから、B地点の物原は素焼→下絵付のプロセスで廃棄された遺物群と考えられる。さらにB地点からはA地点同様多くの窯道具が出土しているが、キキョウ台やツクといった焼台が多量に出土している。

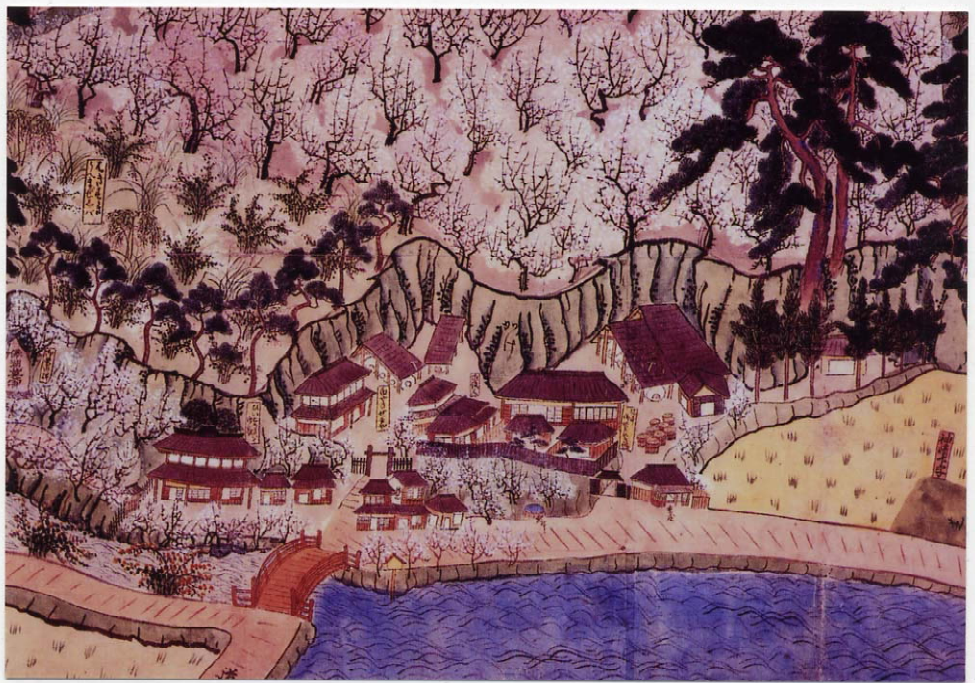
また、素焼製品の中に見込みみ鉄絵による走り駒が描かれた皿が相当量出土しているが、A地点では同種の遺物がほとんど認められない。このようにA地点とB地点では、窯道具や未製品の器種にも偏差が



第1図 七面製陶所跡と田裏窯跡の位置



第2図 七面製陶所跡の位置



第3図 「好文亭四季模様之図」の七面製陶所付近の部分拡大（幕末と明治の博物館寄託）

みられる。器種ごとに焼成する窯が分かれていた可能性が高い。

### (3) 遺物

【陶器】 陶器の大半は焼締陶器で、胎土灰白色、轆轤整形、透明釉を基調とする。器種は土瓶、土瓶蓋、徳利、湯呑碗、行平鍋、片口鉢、捏鉢、花生などが認められ、特に土瓶・土瓶蓋が多い。土瓶の文様はイッチン描が主体で、鉄絵・色絵を施したものも認められる。薄文・波千鳥文・鳳凰文などのほか、これまで知られていなかった梅樹文も一定量認められ（第6図）、斉昭が開園した偕楽園の梅をモチーフに描かせていた可能性がある。

【窯道具】 窯道具はサヤ鉢、輪ドチ、チャツ、キキョウ台ほか、多種にわたる窯道具が出土している。前述したように物原により器種構成に違いがみられるため、未調査地点でさらに異なる種類の窯道具が出土する可能性もある。窯本体の遺存状況が良好ではない中、窯道具の詳細な分類・検討は、七面製陶所の窯構造やその系譜を把握するための重要課題として位置づけられる。

【磁器の焼成に成功していた】 これまで七面製陶所では、土瓶や徳利などの日常雑器を焼成していたことが表面採集資料によって知られていたが（水戸市立博物館前掲）、今回の調査では、陶器とともに磁器の染付碗・皿などの破片がA地点の物原から出土し、磁器の焼成に成功していたことが裏付けられた（第7図）。

【偕楽園の銘款】 A地点の物原からは、花生と思われる比較的肉厚の破片と、蒸し器の破片（ともに素焼）に篆書体で「偕楽園」と書かれた瓢箪形の銘款が押された資料が出土した（第8図）。これまで個人蔵資料で七面製陶所の染付が描かれている花生や陶器製の花生、さらにボストン美術館所蔵のEdward Sylvester Morseコレクションの花生（飴釉を基調とし、上から海鼠釉をかけた陶器）にも同様の銘款が押されていることが知られていた（第9・17図）。モースコレクションのカタログや日本古陶銘款集では、類似した名称から紀伊藩の御庭焼である偕楽園焼の銘款と混同されていたが（Morse 1901、陶器全集刊行会編 1940）、この度の調査によりこうした銘款が押されている資料が七面製陶所で生産されていた七面焼であることが確実となった。

ただし、瓢箪形の銘款はモースコレクションカタログの1357番の輪花皿（第13・16図）、1358番の三つ葉葵の紋が内面に描かれた碗（第14・16図）の底面にもみられ、篆書体で「偕楽」の2文字が確認できる（第16図）。これらは1835年頃の製作資料として位置付けられていることから、瓦谷の製陶所産の資料である可能性もあるが、モースコレクションカタログの1577番の壺（第15図）には、「偕楽園」と「偕楽」の両方の銘款がみられる。その事から本資料は、2種の銘款が同時に使われたことを立証する資料と言える。

このような状況から、こうした銘款は少なくとも2つ存在すると考えられる。「偕楽園」の銘款が施された陶器の花生を所有されている県内在住の個人の方に聞き取り調査を行ったところ、花生は先祖の方が斉昭から下賜されたものであるという。こうした銘款の施された資料は点数的にも少ないことから、贈答用などの嗜好品に限定して押されていた可能性が考えられる。

【瓦葺きの覆屋】 A地点の付近からは近世瓦の破片が少なからず出土している。A地点の窯が「好文



第4図 七面製陶所跡A地点の物原断面



第5図 七面製陶所跡B地点の物原検出状況





第6図 多様な絵付けの土瓶／土瓶蓋



第7図 A地点出土の磁器



第8図 「借樂園」の銘款を有するA地点出土の素焼き花生片



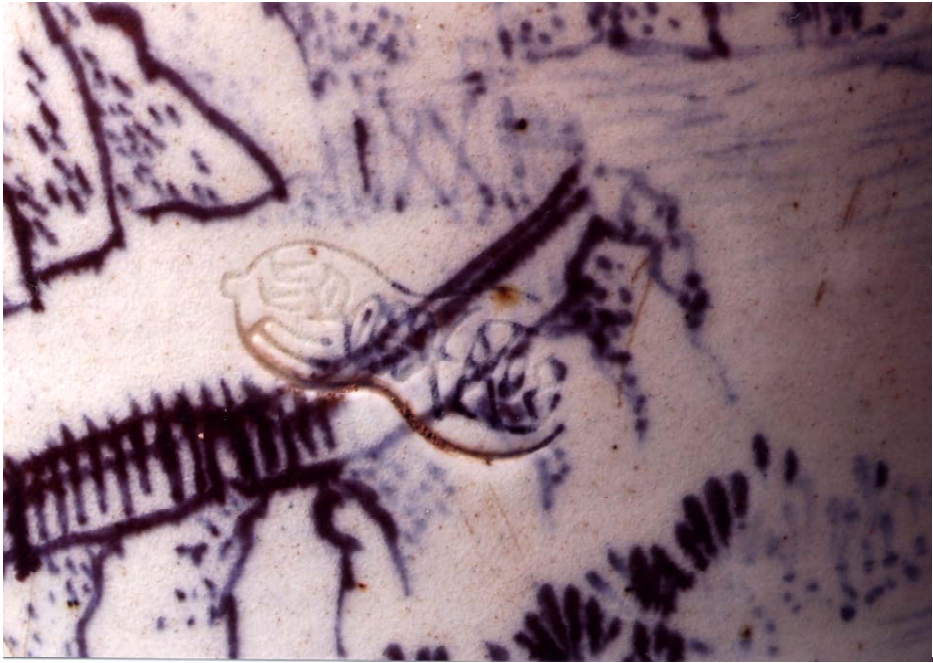
第9図 「借樂園」の銘款を有するMorseコレクションの陶器花生（ボストン美術館所蔵No. 1578）



第10図 「借楽園」の銘款を有する個人蔵の焼締陶器花生（「好文亭四季模様之図」の染付）



第11図 「借楽園」の銘款を有する個人蔵の焼締陶器花生（連房式登窯付近の部分拡大）



第12図 「偕楽園」の銘款を有する個人蔵の焼締陶器花生（銘款部分の拡大）



第13図 「偕楽」の銘款を有するMorseコレクションの陶器輪花皿（1）（ボストン美術館所蔵No. 1357）

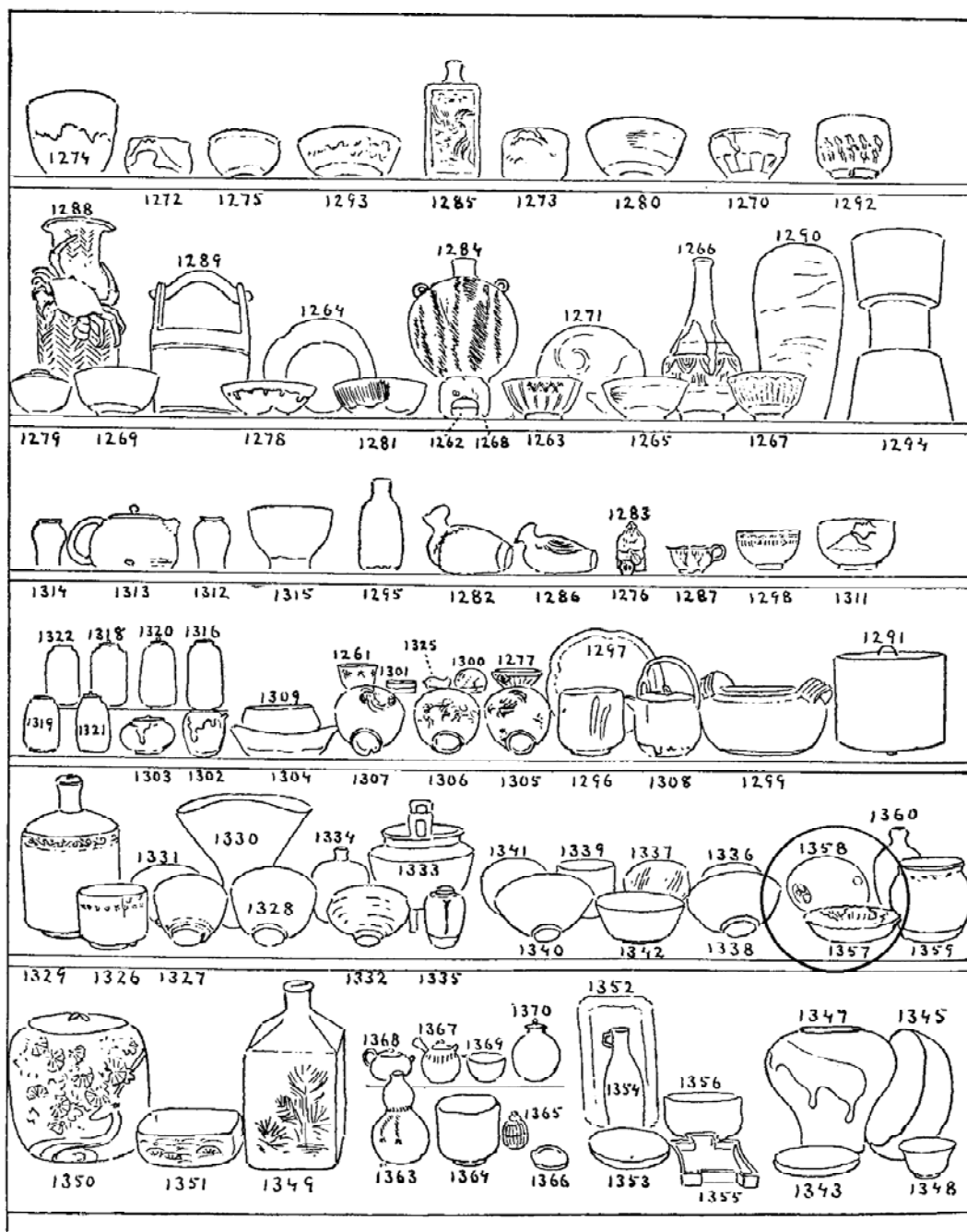


第14図 「偕楽」の銘款を有するMorseコレクションの陶器碗（2）（ボストン美術館所蔵No. 1358）



第15図 「偕楽園」と「偕楽」  
の銘款を有するMorseコレク  
ションの陶器壺（ボストン美  
術館所蔵No. 1577）

CASE 12



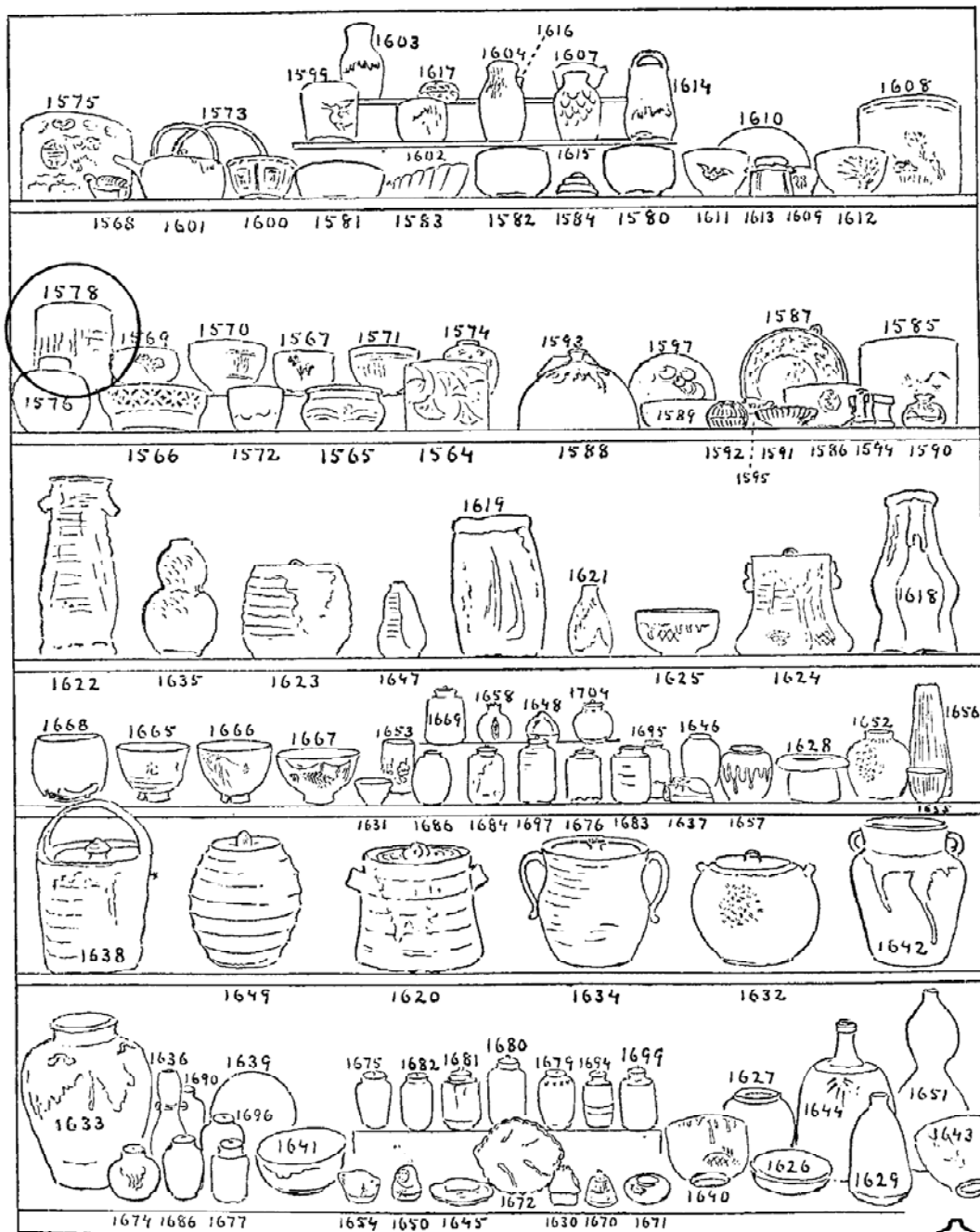
PROVINCES OF YAMATO, ECHIZEN, CHIKUGO, IYO, SHIMOTSUKE, KŌZUKE, HIDACHI, AND MINO



第16図 「借楽」の銘款を有するMorseコレクションの陶器の収納状況 (No. 1357と1358)

1357

CASE 15

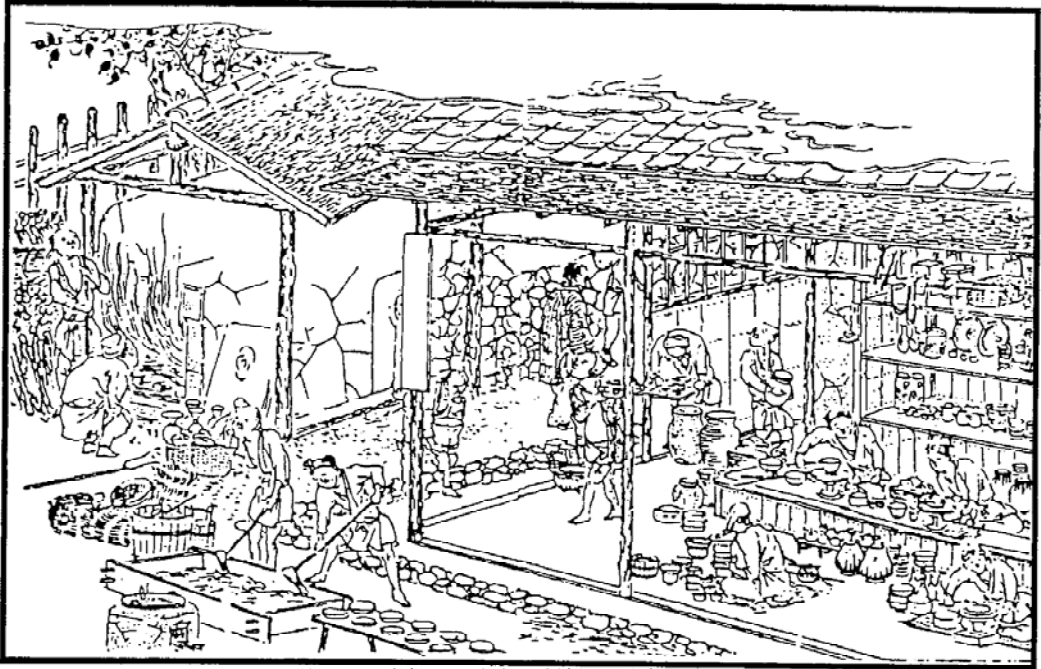


PROVINCES OF KII AND IGA

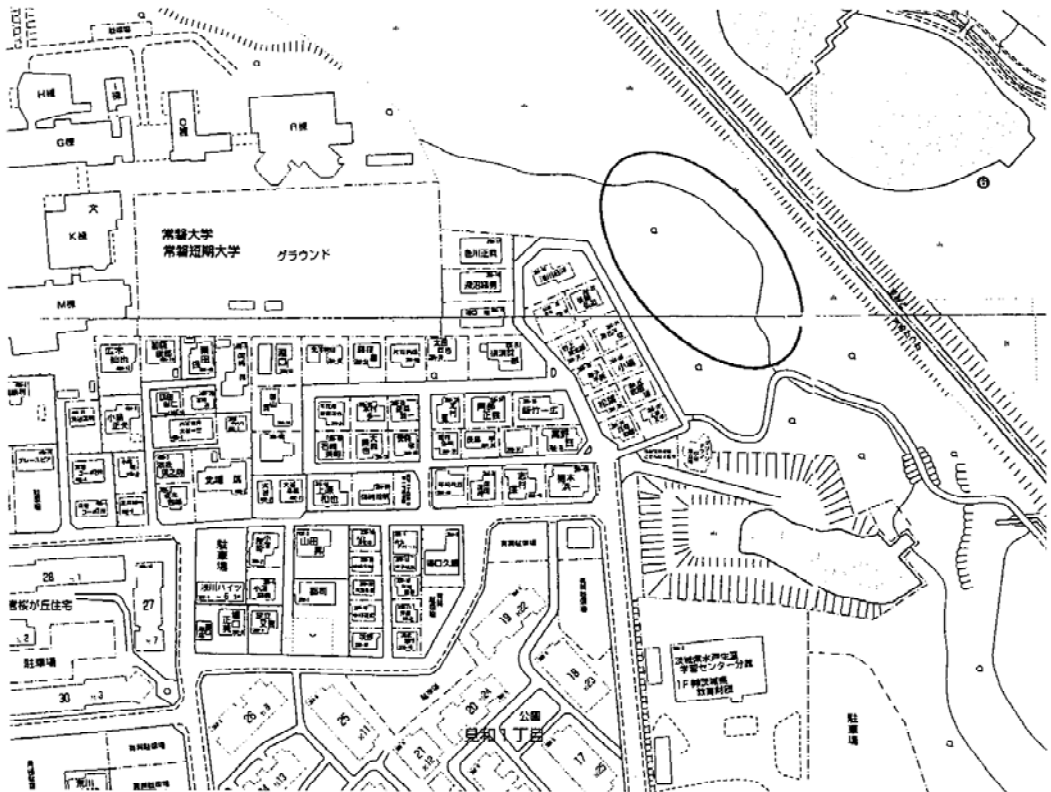
第17図 「借楽」の銘款を有するMorseコレクションの陶器の収納状況 (No. 1578)



1578



第18図 常磐公園覧勝図誌続編原稿窯場之図



第19図 囲裏窯跡の位置



亭四季模様之図」の最も東側に描かれている「諸事御せ戸やき場」であったとすると、窯の東側には屋根を持つ施設が併設されていたことになる。『常磐公園攬勝図誌続編原稿・窯場之図』（松平俊雄著）によると、窯の覆屋は丸瓦が葺かれているが、屋根の大部分は板葺きか茅葺きのように表現されている。他方、陶工たちが陶磁器を成形したり、乾燥させる工房は庇の部分は板葺きか茅葺きのものであるが、さらに上の方は棧瓦葺きに表現されている（第18図）。このような絵画資料から、出土した近世瓦は窯と工房の屋根に葺かれていたものと考えられる。

#### 4. 囲裏窯跡の発見

##### (1) 発見の経緯

平成18年4月7日、住民からの通報が茨城県教育財団にあったことを受け、川口・関口両名が現地踏査を実施し、遺跡の存在を確認した。

これにより遺跡名を、小字名「囲裏（かこえうら）」を用いて「囲裏窯跡」とし、水戸市の周知の埋蔵文化財包蔵地として新たに登録した。

##### (2) 遺跡の概要

【遺構】 沢渡川沿いの斜面地一帯に遺物が散乱しており、この斜面を利用して登窯が築かれたと思われる。斜地は後世の削平をかなり受けており、現況では窯跡の明確な比定は困難である。しかし削平された斜面の土層の中に焼土層が認められるなど、この地に窯が築かれていたことは確実である。

窯の数は不明だが、遺物の散布状況から数基程度あったことが予想される。

【採集遺物】 現地踏査により、遺物収納箱にして1箱分が採集された。

生産品としては、折縁鉢、播鉢、土瓶、植木鉢などの比較的大型の陶器が多く採集された。鉢には海鼠釉を掛けているものが多く、特徴として挙げられる。採集遺物の中に肥前産の筒茶碗が認められており、18世紀後半～19世紀にかけて営まれた可能性が高い。

また、6～3cm大の胎土目（たいどめ）も大量に採集されている。

生産品の胎土は灰色を呈し、キメは粗く、素朴な造りである。水籤を念入りに行い、不純物を取り除いていた七面焼の胎土とは、製作工程上かなりの差が認められる。

##### (3) 特徴

囲裏窯跡は、水戸城下町・近郊農村への流通を意図していた可能性が高い。このことは、北を沢渡川に接し、南を岩間街道に接しているという、本遺跡の立地から想定できる。沢渡川・岩間街道は、水戸城下町と近郊農村を結ぶ河川・街道であり、本遺跡はその要所に位置していた。

窯の規模は現況から判断する限り、中小規模であったと思われる。生産品は総じて粗雑であり、土瓶・播鉢・植木鉢など日常雑器に限られている。下級武士・町人・百姓層への供給を主として意図していたのであろうか。逆に七面焼は主に中・上級武士層への供給を意図していた可能性が高い。

囲裏窯跡と七面製陶所の生産品には明らかな違いが認められることは先に述べたとおりである。囲裏窯製品は、胎土や色調などの観察の限り、冒頭に紹介した松岡焼など北茨城市域の陶器類や笠間焼系陶



第20図 困裏窯跡の近景



第21図 困裏窯跡採集遺物

器類などにその系統を追うことができる可能性がある。しかしながら、いずれの窯についても現段階では発掘調査がほとんど行われておらず、表採資料というきわめて限られた資料のなかからの比較検討を余儀なくされている。発掘調査によるプライマリーな状態で検出された標準資料の少なさは、茨城県下における近世窯業形態の実態把握にむけてのおおきな課題として挙げられるであろう。

いずれにせよ、困裏窯跡の操業時期は、七面焼の操業時期と重なっており、七面焼の研究の上でも注目される遺跡であるといえよう。城下町近郊において同時期の窯が検出されたことにより、水戸における近世後期の窯業形態は、予想以上に多様であることが分かってきた。

## 5. 水戸城下における近世生産遺跡調査の課題

これまで存在が指摘されていながら、操業形態や生産された製品の全容が不明であった七面製陶所の一角において発掘調査が行われた意義は大きい。現時点では西限を確定できていないが、確認できた範囲は、埋蔵文化財包蔵地として登録した。

平成17年度の確認調査では3基あるとされる連房式登窯のうち1基を確認し、物原の部分的な調査により、操業形態の解明や町田焼や小砂焼との比較検討を行っていくための多くの基礎資料を得ることができた。未確認となっている「好文亭四季模様之図」に描かれた西側の2基の連房式登窯は、常磐神社階段西側の谷津内に眠っている可能性があり、今年度の秋に予定している確認調査で所在を確認したいと考えている。調査は常に公開していることから、先学諸氏には是非、現地へ足をお運びいただき、ご指導・ご鞭撻をお願いしたい。

また、平成19年3月に刊行を予定している報告書では、窯跡の操業形態を復元していくために、出土した120箱分の陶磁器類と窯道具の分類、組成比率などの定量的な分析を行う予定である。

さらに、七面焼の流通範囲を把握するためには、今後、市街化が進んでしまっている武家屋敷や城下町の範囲においても積極的に調査を行うとともに、これまで市内で行われた発掘調査において出土した近世陶磁器類についても再調査を行い、七面焼が含まれていないかを確認していく必要がある。

現時点では確定していないが、水戸城下に比定される大鋸町遺跡第2地点の2号土坑から出土した陶器の土瓶で京焼とされている陶器（齋藤・新垣 2005の第57図-6）は、七面焼と類似した胎土や絵付が確認されることから七面焼の可能性もある。また、本年6月に確認調査を実施した水戸城三の丸の堀底から、七面焼の土瓶片が出土している（2006年度報告書刊行予定）。

しかし、城下町が存在したと考えられる地域とは対照的に、平成15年度から保存目的の確認調査を実施している水戸市成沢町の日新塾跡からは、七面焼と思われる陶磁器類の出土は確認されていない。どのような階層の人々の間で流通したのか、今後、検討して行く必要がある。

遺物研究の中でも関心の寄せられる課題のひとつとして、七面焼がどこの土を使っているのかという点が挙げられる。この点については、研究のあゆみでも紹介したように伊藤瓢堂氏が山形県工業技術センターの協力を得て、七面焼の陶器の胎土分析を行なっている（伊藤 2003、2006）。しかしながら、分析された資料は数点であり、陶磁器類の胎土分析からその産地特定を行なうには、試料がまだ乏しいように思われる。また、分析試料がどのような器種であったのかという点も不明である。器種によって土を使い分けている可能性もあることから<sup>3)</sup>、今後、水戸市教育委員会が行なった確認調査で出土した七面焼の胎土分析を行なう機会があれば、焼物の種別とともに器種も明示する必要があるだろう。また、同時に伊藤氏らが行なっているような陶石や粘土の試料採集も比較試料として蓄積して行く必要があるだろう。水戸市が行なった確認調査ではA地点の物原の下層に粘土層が露出している箇所があったことから、参考試料として採取した。比較的胎土の粗い窯道具などにそうした粘土が使われている可能性はないのだろうか。今後、理科学的な胎土分析を行なって、確認する必要がある。

また、民窯と考えられる囲裏窯跡のように沢渡川流域の緑地帯にはまだ、未確認の近世生産遺跡が眠

っている可能性が高い。今後、詳細な分布調査を行なうとともに、とかく取り扱いが軽視されがちな近世遺跡を開発から保護して行く必要がある。

以上、課題は山積みとなっているが、上記に掲げたような基礎的作業を積み重ねて課題を少しずつ克服していくことにより、斉昭が開窯した七面製陶所を中心とした陶磁器生産の歴史とその動態を復元・記述していくことが可能になると確信している。

**謝辞** 本稿は、2006年7月16日に江戸東京博物館の学習室で開催された江戸遺跡研究会第106回特別例会で口頭発表した内容を補訂したものである。発表の機会を与您と下さるとともに有益なコメントを頂戴した江戸遺跡研究会の皆様御礼を申し上げます。

七面製陶所跡の調査にあたっては、特に日本窯業史研究所の水野順敏氏、河野一也氏、河野真理子氏から多大なるご指導を頂戴した。三氏の献身的な支援なしに調査の成功はなかったと思う。また、調査期間中から本稿をまとめるまでに、次の方々、諸機関からも多くの御指導・御教示をいただくとともに物心両面での御支援・御協力を賜った。文末ではありませんが、御芳名を記して御礼申し上げます。

青山俊明、飯島一生、飯塚信久、伊藤瓢堂、川崎純徳、瓦吹 堅、黒澤彰哉、小池 聡、小松崎博一、後藤道雄、斎藤弘道、坂井秀弥、佐藤次男、玉田芳英、寺内義與、茨城県教育庁文化課、文化庁記念物課、宗教法人常磐神社、財団法人水戸市観光協会（五十音順、敬称略）

## 註

- 1) Edward Sylvester Morseコレクションのカタログの巻末に付されているINFORMATIONの138には1578番について、”Mr. Shugio suggests that this piece may be Kairkau of Mito, Hitachi (see Nos.1357, 1358) . The mark in double gourd and the two characters Kairaku being written in the same way as on the rare Hitachi object convinces me that he is right.” (Morse.E.S. 1901 : pp.390) とあるようにMorse自身もHiromichi Shugio（オックスフォード大学で教育を受けた磁器及び傘の輸入業者。First Japan Manufacturing and Trading 社のアメリカ支店の代表取締役を務めた。有名な日本の陶磁器専門家Morseとも親交があったようである。1880年にアメリカ支店の指揮を執るためにニューヨークを訪問）からの教示によって、1578番の陶器花生は、水戸製ではないかと認識していたようである。しかしながら、1577番（目の粗い暖灰色の胎土を持ち、厚い鉄釉の掛かった陶器壺）には、1578番と同じ「偕楽園」と1357番・1358番と同じ「偕楽」の2つの銘款があると記載されているにも係らず、本資料が水戸製の可能性があるとの記述はない。
- 2) 紀州藩のお庭焼である偕楽園焼に見られる銘款は、二重の円形の圏線に囲まれた縦書き二行丸印「偕楽園製」（篆書体で2種類）、圏線を持たない縦書き二行印の「偕楽園製」（楷書体で2種類）、圏線を持たない縦書き一行印の「偕楽園製」（楷書体で1種類）、圏線を持たない横書き一行印の「偕楽園製」（楷書体で1種類）、圏線を持たない縦書き一行印の「偕楽」（楷書体で1種類）、圏線を持たない縦書き一行印の「園製」（楷書体で1種類）があるが、瓢箪形の「偕楽園」や「偕楽」の銘款が施された例は確認されていない。
- 3) 第1次確認調査で出土した素焼資料を実見いただいた伊藤瓢堂氏のご教示による。

## 引用・参考文献

- 伊藤瓢堂 2003 「斉昭公の『陶の道』についての試論—水府村「町田焼の調査」—」『水戸史学』第59号 水戸史学会  
2006 『幕末における水戸藩の窯業—「神崎七面焼について」』（平成18年度水戸史学大会講演資料）
- 大川 清 1985 『小砂焼』日本窯業史研究所
- 大西林五郎・藤井理白編 1920 「十三 関東の諸窯（イ）水戸後楽園焼」『陶器全書続編 日本陶工傳』松山堂書店
- 尾崎泰弘 2001 『<特別展>黎明のとき—飯能焼・原窯からの発信—』飯能市郷土館
- 加藤雅美 1997 『笠間焼200年のあゆみ』茨城県立歴史館
- 株式会社ゼンリン 2006 『ゼンリン住宅地図200602茨城県IBARAKI水戸市【北部】』
- 川口武彦・関口慶久・新垣清貴 2006 「(41) 水戸市常磐町所在『七面製陶所跡』の調査と課題」『日本考古学協会第72回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
- 河野一也・水野順敏・河野真理子 2004 『町田焼窯跡』水府村教育委員会
- 瓦吹 堅 1986 「北茨城市の陶器窯跡と窯道具について」『北茨城市壇』第6号 北茨城市編さん委員会  
1991 「松岡焼と名古屋焼」『いわき地方史研究』第28号 いわき地方史研究会  
1992 「北茨城市大塚窯跡出土の近世陶器」『いわき地方史研究』第29号 いわき地方史研究会  
1993 「北茨城市木皿窯跡出土の近世陶器」『いわき地方史研究』第30号 いわき地方史研究会  
1994 「北茨城市石岡窯跡出土の近世陶器」『いわき地方史研究』第31号 いわき地方史研究会  
1995 「北茨城市内の近世窯跡—木皿窯跡—について」『王朝の考古学—大川清博士古稀記念論文集—』雄山閣  
1997 「日棚窯跡の灯火器」『いわき地方史研究』第34号 いわき地方史研究会  
2003 「窯はどこにあったの」『國學院大學考古学資料館紀要』第19号 國學院大學考古学資料館
- 鬼頭明子 2006 「SPOT 七面製陶所跡の発掘—水戸市教育委員会生涯学習課—」『常陽藝文2006/7月号』278号 財団法人常陽藝文センター
- 木戸田四郎 1976 「第三節 諸産業の動態と新政策 陶器」『水戸市史 中巻（三）』水戸市役所
- 近藤京嗣 1988 「茨城のやきもの（16）」『陶説』427 日本陶磁協会
- 齋藤 洋・新垣清貴編 2005 『大鋸町遺跡 グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会・グランディハウス株式会社・株式会社地域文化材コンサルタント
- 住谷光一 2004 『水戸藩町田焼窯跡発掘調査記』（私家版）
- 田原康司 2005a 「笠間系陶器の時期設定」『茨城県考古学協会誌』第17号 茨城県考古学協会  
2005b 「笠間系陶器の時期設定」『第27回研究発表会資料』茨城県考古学協会
- 陶器全集刊行会編 1940 『日本古陶銘歌集 近畿編』平安堂書店
- 吹野富美男 2005a 「記年銘を有する笠間焼」『婆良岐考古』第28号 婆良岐考古人会  
2005b 「『文久三年』銘が墨書された笠間焼黒釉壺」『歴史智の構想—歴史哲学者鯨岡勝成先生追悼論文集—』第28号 鯨岡勝成先生追悼論文集刊行会
- 松崎睦生 1978 「VI. 鉄幹 十二・一月 斉昭、陶器の窯を築く」『偕楽園歳時記』暁印書館
- 水戸市 2005 『水戸市第5次総合計画 MITO元気PLAN』
- 水戸市教育委員会 2005 『水戸市常磐町所在 七面製陶所—平成17年度確認調査現地説明会資料—』
- 水戸市立博物館 1984 『郷土の伝統産業 特別展 水戸藩のやきもの』

Morse, E. S. 1901 Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery. Charles E. Tuttle Company Rutland, Vermont & Tokyo Japan.

窯業史博物館 1998『水戸の烈公と小砂焼』

## 図表出典

第1図 『茨城県遺跡地図』1:25,000「36 水戸 (R)」に加筆。

第2図 水戸市都市計画図1:2,500に加筆。

第3図 幕末と明治の博物館寄託資料（水戸市立博物館1984の企画展チラシの該当部分をスキャナーで取り込み）

第4～8図 筆者撮影。

第9図 ボストン美術館ホームページの所蔵資料検索ページ

([http://www.mfa.org/collections//search\\_art.asp](http://www.mfa.org/collections//search_art.asp)) よりダウンロードしたデジタル画像を転載。

第10～12図 所有者の方のご厚意により撮影させていただいたデジタル画像（Nikon社製D70による）を掲載。

第13～15図 ボストン美術館ホームページの所蔵資料検索ページ

([http://www.mfa.org/collections//search\\_art.asp](http://www.mfa.org/collections//search_art.asp)) よりダウンロードしたデジタル画像を転載。

第16・17図 (Morse, E. S. 1901) より転載、加筆。

第18図 (窯業史博物館 1998) 表紙原図をスキャナーにより読み込んだものをAdobe社製Photoshop5.5 (Macintosh版) により加工。

第19図 (株式会社ゼンリン 2006) より転載、加筆。

第20・21図 筆者撮影。

第1表 (大川 1985)、(窯業史博物館 1998) を基に筆者作成。

## 萩藩毛利家屋敷跡遺跡

小坂井 孝修

(東京都埋蔵文化財センター)

### 遺跡の位置と環境

遺跡は港区赤坂九丁目7番5号に所在し、武蔵野台地東端、淀橋台の一部である赤坂台の、開析された谷に囲まれた台地上に位置する。

当地は、江戸時代には萩藩毛利家の麻布屋敷にあたっていた。寛永13年(1636)に拝領されてから、幕末の動乱期に国元に引き上げることによって幕府に返還された元治元年(1864)まで、約230年間屋敷を構えていた。明治時代以降は陸軍の施設が設けられ、昭和時代になり防衛庁の敷地に引き継がれた。